sendai-city chronicles communication paper.

せんだい市史通信

第4号
仙台市博物館
市史編さん室

歳の市（大正14年）仙台市歴史民俗資料館蔵

せんだい今昔 名字が語る歴史

仙台に古くから住んでいる方でしたら、「ああ、この人はあの辺りの出だろうな」と連想させる名字をいくつもご存じかと思います。人の動きが激しくなった近年ではさほど目立たなくなってはきましたが、それでも旧家の方からその地域の名字の特殊な分布を教えていただき、改めて驚かされることがあります。今回は太白区を例に、そうした名字分布のあり方をご紹介したいと思います。

もっとも目立つ例として、珍しい名字がある特定の狭い地域に偏って分布している例を挙げることができます。例えば、郡山の赤井沢や安斎、中田の壱岐、といった名字がその代表的なものです。

また、四郎丸や袋原近辺に多い菅井姓のように比較的広い範囲に分布している例もいくつか存在します。この例の変形として、郡山と鈎取、茂庭に分布する沼田姓のように、離れた地域に同じ名字が特徴的に分布する場合もあります。

その他にも、富田ではかつては大部分の家が板橋姓であったり、柳生では以前は佐藤、阿部、山口の３つの名字しかなかったというような特殊な分布例も存在します。

こうした名字の分布のあり方は、平野部では江戸時代の村ごとにかなり特徴的な分布をし、隣接する村どうしの類似点が少ないのに対して、山間部では村の範囲を超えて、広い範囲で分布の類似性が認められるようです。宮城県の山間地域に広く分布する早坂姓は後者の代表例ということができます。

江戸時代、一般の人達は名字を名乗ることが許されませんでした。しかし、名乗ることを許されなかったことと名字を持つことは別の問題であり、江戸時代の庶民の多くは、自分の家の名字が何であるかをきちんと記憶していたようです。

そうした記憶があったからこそ、名字の分布に地域的な特色が生じたのでしょうが、それが江戸時代の「村」の構造や人々の交流とどのように関連しているのか、まだまだ不明なことが多く、地域の歴史を考える上での今後の大きな課題といえるでしょう。

仙台市史 新刊できました

「仙台市史」に『通史編2 古代中世』と『資料編4 近世3 村落』が登場しました。タイトルに漢字ばかり並んでいて難しそうと思われるかもしれませんが、中身は決して難しいことばかりではありません。今回は『古代中世』の見どころと、『近世3 村落』に収録されているちょっとほほえましい資料についてご紹介します。

通史編2 古代中世

通史編の2巻目です。3世紀後半に始まる古墳時代から16世紀末の戦国時代の終わりまで、約1300年間の仙台地域の歴史が著されています。

この本には9つの章が立てられています。序章「古代・中世の仙台」、第一章「古墳の時代」、第二章「陸奥国と仙台平野」、第三章「律令社会の変貌」、第四章「兵と歌枕」、第五章「留守氏と国分氏」、第六章「多賀国府から大崎御所へ」、第七章「戦国の動乱」、終章「千代から仙台へ」です。

序章では古代中世の自然環境にふれます。

第一章から第三章が古代です。これら3つの章では、仙台地域の古代を、大和王権や律令国家との関係や北方社会とのかかわりのなかで描いています。とくに、7世紀半ばには城柵、後半には国府が太白区郡山に置かれ、8世紀前半には国府があらたに建設された多賀城に移されますが、これらが律令国家の蝦夷支配に大きな役割を果たしたことを詳しく述べています。

第四章から第七章が中世です。この時代の主役である武士たちの興亡・盛衰を全国的な歴史の展開のなかに位置づけながら描いています。とくに、仙台市域における二大領主である留守氏・国分氏、南北朝・室町時代に仙台平野をはさんで対峙した南北の大勢力である伊達氏・大崎氏については詳しく筆を及ぼしています。また、当時の生活や信仰、さらに交通や流通についても、考古学的成果や板碑資料なども材料にして述べています。

遠見塚古墳 （写真提供 仙台市教育委員会）

終章が語るのは仙台地域における中世の終焉です。

以上の9つの章に特論の2編、「古代陸奥国の瓦」と「奥州伊達氏の系譜」が加わります。

この本では、最新の研究成果を取り入れながら、豊富なカラー図版を援用して、わかりやすく仙台の古代中世を叙述しています。

資料編4 近世3 村落

「働き方留覚帳（はたらかたとめおぼえちょう）」という日記があります。江戸時代仙台藩領内の村落に暮らしていた人々の「ふだん」を知ることのできる資料です。

この日記を書いた久兵衛は、上愛子村（青葉区上愛子）に在郷屋敷を持つ仙台藩家臣森田氏の家中（家来）で、嘉永6年（1853）12月から1年間の自分の行動を、一日ごとに箇条書きで記しています。藩士の家来とはいっても仙台藩では普段は農業に従事している人も多かったということがわかります。

文字がつたない感じで、かなや、なまり、方言などもそのまま記しています。単語をあげると「すすはぎ（煤掃き）」「もぢつき（餅つき）」など。ほかにも文字は解読できても、方言なのか、実際の作業が推測できない単語がたくさんあります。

生活に密着した記述は家族の様子も伝えてくれます。娘と栗拾いに行く。娘が「病気ニてかんびよふ（看病）」を丸三日続ける。城下へ炭売りに行き、売ったほまち（臨時収入）で帰りに「をかゝ（奥さん）」に城下からみやげを買って帰ることもありました。

「働き方」ですから働くほうはどうかというと、家来らしく岩沼まで江戸から帰る主人の迎えに出たり、一日中「田ノ草取」「米つき」といった日もありますが、「あすび、はらあんばへがわろへとて（休み、腹あんばいが悪いので）」「めがまハるとて朝ニをギツ（目がまわるので朝に起きず）」など、働かなかった記述もあります。

本人はただ単純に毎日を書いただけだったのでしょうが、家族思いでちょっとのんびりしたお父さんだったのかな、などと想像させてくれる、とてもおもしろい資料です。

『資料編4 近世3』は、付録の村絵図とあわせて仙台市域の江戸時代の村々の様子を読み取ることができる本です。

『市史せんだい』のお知らせ

『仙台市史』の機関誌『市史せんだい』は年1冊刊行されており、現在Vol.10まで刊行されています。巻頭の座談会では、身近でいて意外と知らないまちの歴史が発見できます。ほかに『仙台市史』本編に関連した論文や史料紹介などを収録しています。

『市史せんだい』のお求めは仙台市博物館2階売店でどうぞ。価格は1冊900円（税込）です。

※Vol.1とVol.2、Vol.4は品切れとなっております。

Vol.10の特集は≪地元学の現在とこれから≫。自分の住むまちをもっと知りたい人におススメです。

読者のひろば

11月11日に行われた市史セミナーで、『仙台市史』についての情報はどこから入ってくるか参加した人たちにお聞きしました。

市史通信	35名
市史せんだい	30名
新聞・雑誌	24名
リーフレット	18名
ポスター	15名

市史通信が最も多かったのですが、市史を読んでいない人に限ると新聞・雑誌にはまだ及びません。『仙台市史』を知らない人たちにも興味をもって読んでいただける紙面づくりを目指したいと思います。

市史セミナーが開催されました

「仙台市史セミナー」は、仙台市史の執筆者が市史の内容について講演を行うイベントで、年に1回行われています。

今年で10回目となるセミナーは11月11日（土）に開催され、およそ230名にご参加いただきました。今年のテーマは「開府以前の仙台」。『通史編2 古代中世』の執筆者である今泉隆雄（東北大学教授）、岡田清一（東北福祉大学教授）、羽下徳彦（東北大学名誉教授）の三氏が、遺跡や板碑、国分氏を通じてみた仙台の古代中世について講演しました。

熱心に講演を聞く来場者

施設・探訪 秋保工芸の里

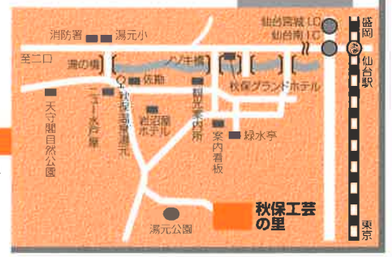
仙台市史で使いたい写真や資料が博物館にないとき、必要なものはよそからお借りします。また、資料が見つかれば調査にでかけたりもします。このコーナーでは、市史編さん事業の過程で訪れた施設をご紹介します。

秋保温泉から歩いて１５分ほどのところに「秋保工芸の里」があります。仙台在住の工人グループにより昭和４７年ころに「職人村づくり」の構想が生まれました。これが昭和５０年には「手工芸の邑」計画となり、昭和６３年に「工芸の里」として結実したものです。

ここには仙台箪笥、伝統こけし、木地玩具、江戸独楽、茶用道具（指物）、茶器（埋もれ木）、自然木加工、染織など伝統の技術を守り継承する九世帯の工人が、家族とともに生活し製作に励んでいます。

雄大な自然に包まれた「工芸の里」は広場を中心に工房が立ち並び、駐車場ほかの設備も完備しています。各工房では製品を販売するだけでなく、実習体験も行っています。

ここは親しく工人と語り合いながら、自分のイメージに合った作品に出会えるところです。



秋保工芸の里

仙台市太白区秋保町湯元字上原54
TEL 022-399-2111
（秋保総合支所総務課）
定休日／不定休
営業時間／9：00～17：00

MONO GATARI SENDAI

モノがたり仙台

ながしぎたきぎ

流木薪

木流しは、河川の流れを利用して、上流の山林から伐りだした薪を大量に運搬するもので、その薪（流木）を、「ながしぎ」とか「りゅうぼく」と呼んでいます。広瀬川の木流しは、定義（じょうげ・青葉区大倉）を起点にした場合、流木を引き揚げる木場（きば）のあった仙台の大橋上流までの約32kmを、一週間くらいで運搬できました。

江戸時代初期から仙台藩管理のもとに行われていた広瀬川の木流しは、廃藩で一時その姿を消しますが、明治10年（1877）頃には再開され、昭和17年（1942）にトラック運送へ転換するまで継続します。近郊山村からの駄馬や荷車・荷馬車による供給もありましたが、木流しによる流木薪（ながしぎたきぎ）は、長期間にわたって、仙台のエネルギー源としての役割を果たしました。

『河北新報』（明治39年5月27日）の「広瀬川流木の現況」を読むと、当時、仙台で流木薪の用途がますます広まっており、その中でも第二師団各隊の需要が最も多く、その他事業家や商店などにも売り出していること、木場は、大橋上流の仲の瀬と澱（よどみ）の二カ所にあったこと、一日の川からの引き揚げ量は数十万本に及び、ブナや楢の類が多いこと、木流しは、雪解け水による増水期の春に行われ、木場で働く者が七・八十人もいて、引き揚げた流木薪を棚に積み上げ、通算すると八・九千棚（一棚は高さ幅五尺、一尺は約30cm）にも達していたようです。

広瀬川の流木薪は、長さ三尺と一尺五寸が多く、流木会社や仲買会社が、軍隊、官庁、学校、会社、醸造業者、風呂屋、菓子屋、旅館、料理店、停車場などに販売していました。しかし、大正期（1910年代）に、大口取引先が石炭を使用するようになると、小口への販売もしていたようです。

なお、太白区の木流堀（きながしぼり）も、名取川の流木薪の歴史を今に伝えるものです。

（流木薪および木流しについては、『特別編6　民俗』をあわせてご覧ください）

木流しの服装を再現（青葉区新川）　仙台市歴史民俗資料館蔵

既刊紹介

「伊達」と称される仙台藩独自の強烈なまでの美意識。これは伊達政宗と彼の家臣たちによって生み出されました。東北にあった室町時代の流れをくむ伝統的な文化を基盤とし、彼らが京都で触れた、当時の先端であった桃山文化を融合したものといわれます。

飛鳥時代以降、奈良や京都、江戸（東京）などの「中央」に対して、仙台近辺は常に「地方」であり続けてきました。仙台の美術・工芸の歴史は、「中央」から学び、取り入れつつも「地方」の独創性を打ち出すための努力の連続だったのかもしれません。

『特別編３　美術工芸』では、江戸時代のみならず、古代から現代に至るまでの仙台近辺の美術・工芸の歴史や特色、代表的な作家たちについて詳しく解説しています。

また、６００点近いカラー図版を掲載し、「よむ」だけではなく「みる」ことにも重点を置いた一冊となっています。とくに巻頭の口絵では、各時代を代表する美術品・工芸品が３２ページにわたって大きく紹介されています。

鳳凰図　狩野左京筆（宮城県指定文化財 松島博物館所蔵）

既刊好評発売中

仙台の歴史を完全収録 各分野ごと続々登場

【通史編2】古代中世（新刊）
【資料編4】近世3　村落（新刊）

【通史編１】原始
【資料編１】古代中世
【資料編２】近世1　藩政
【資料編３】近世2　城下町
【資料編５】近代現代1　交通建設
【資料編10】伊達政宗文書1
【特別編１】自然
【特別編２】考古資料
【特別編３】美術工芸
【特別編４】市民生活
【特別編５】板碑
【特別編６】民俗

【通史編】3,000円（税込み価格）
【資料編】4,000円（税込み価格）
【特別編】6,000円（税込み価格）
板碑のみ 5,000円（税込み価格）

●発売元／宮城県教科書供給所
〒980-0021　仙台市青葉区中央二丁目9-22
TEL/022-222-5052　FAX/022-222-5056
県内主要書店で発売します。本の発送をご希望の方は、上記あてにお申し込みください。なお、郵送の場合のお支払いは、配本時に同封する振込用紙にてご入金ください。
●詳しくは、仙台市博物館市史編さん室までお問い合わせください。
仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862　仙台市青葉区川内三の丸跡
TEL/022-225-0814　FAX/022-216-1830

仙台市史全30巻
◆通史編／原始・古代中世・近世1～3・近代1～2・現代1～2
◆資料編／古代中世・近世1～3・近代現代1～4・伊達政宗文書1～3・慶長遣欧使節
◆特別編／自然・考古資料・美術工芸・市民生活・板碑・民俗・城館・文化芸能史・地域史

あとがき　編さん室より

「市史通信」第4号をお届けします。早いものでもう少しで2000年も終わり、いよいよ21世紀が始まります。そこで新世紀に向けて、というわけではありませんが、タイトルのデザインを変えてみました。いかがだったでしょうか。

せんだい 市史通信 第4号
発行年月日／平成12年11月30日
編集・発行／仙台市博物館市史編さん室
〒980-0862　仙台市青葉区川内三の丸跡
TEL/022-225-0814　FAX/022-216-1830
URL http://www.city.sendai.jp/Section/Kyouiku/Museum/